

中学校書写と各教科とのつながり

— 指導要領・各科教科書を資料として —

久 米 公

一 はじめに

各教科学習の間に、まったくつながりを持たないものは、まずなかろう。同一題材が視点を變えて扱われるという内容面のつながり、あるいは、題材内容はまったく質を異にしてはいるが、考え方において共通していたり、また、一方が他の基本になって、その上に展開されるなど、そのつながり方は一樣ではないが、無縁なものはないといつてよい。

たとえば、「国語」における古典は「歴史」の学習の中で、時代の文化のながれの上に登場し、時代背景の理解なしにその古典の確かな理解をはかることはできないし、また、「音楽」学習においてとりあげられる詩歌の歌意・詩型等は「国語」での学習が基礎となつて理解されるものである。一見無関係とみられる「国語」と「数学」についても、たとえば、論説文・説明文の読解・作文等の

学習において、数学の論理的な考えのすすめ方や証明のしかたなどの理解がつながり合うことは否定できないであろう。

九教科は、いわば、互いに交じわり、からみ合つて離れることのできない輪のようなものであるといえよう。

そこで、当然のことながら、指導にあたっては、各教科それぞれが、他とどのように交じわり合っているかを、よくよく見きわめておくことがきわめて必要になってくる。他教科との関連を無視して、自教科の立場からだけの指導がなされるとき、生徒には、個々別々のものとして理解されるようになりやすい。同じ題材が違った角度から扱われているということに気づかなかつたり、あるいは、用語や扱ひ方の違いから理解に混乱を生じたり、さらには指導者への不信感を起こしたりなどして、学習への興味・意欲を減退させることになりかねない。有機的・総合的な理解を、生徒自身でやれる段階になればともかく、中学ではまだそれを望めない。だから、ま

ず、指導者の頭の中ではつきりと他との関連を見きわめていることがきわめてだいじである。その上に立って学習指導がすすめられるとき、おのずから各教科が有機的・総合的に理解されていくという姿が見られるようになる。

二 書写と国語

「書写」の指導が、国語教育の中で、他の領域と密接なつながりのもとにすすめられることの必要は、今さら言うまでもないことである。しかし、現実には、「書写」が技能的なものを中心に行なわれるところから、現場では、同じ国語の中にあっても、指導者を異にすることが多いということもあって、ともすれば「書写」というわくの中だけで閉鎖的に行なわれがちである。何か孤兒的な存在として、自他ともに認めようとしがちである。たしかに、国語教育の中にあつて異質的な領域を占める存在ではある。だが、いつまでもその面にはかりこたわり、そのからにとじこもつていては、ますますとり残され厄介者視されることになってしまうであらう。この際「書写」の側から、「書写」の特質をよく見つめつつ、他領域とつながる面を積極的に押しひろげ、またほり下けて、密接化をはかっていくべきであらう。また、他領域からも「書写」に対して理解の眼を注ぎ、互いに求め補い合つて、より豊かな国語教育の姿を招来したいものである。

さらにまた、このように国語科の中での位置をたしかにしていくだけでなく、「書写」を全教科教育の一部として見すえることもおそろかにしてはなるまい。他教科とどうつながり合っているか

を究明することによって、国語の中で、どの面が異質的であるかがよりはつきりするであらうし、どうあったらいいかということも考えやすくなってくるのではあるまいか。

この考えのもとに、以下教科の順を追つて指導要領と教科書を眺めながら、その間の関連をさぐつてみようとするものである。

三 書写と各教科のつながり

各教科が、互いに交わり重なり合つた輪であるとなれば、その中心的な位置にあるものは国語科であると言つてよからう。どの教科も「文字」「ことば」を媒体として学習指導がすすめられるといふことから、国語科と各教科との交わりは大きい。

その国語科の中で一つの領域を占めている「書写」とはそれではどんなにつながっているであらうか。ごく大まかにいって、次のようにあげることができると思つう。

全教科との一般的つながり

- イ 読みやすく、見て感じのいい文字を書く。
- ロ その場に応じた書き方ができ、全体が調和よくまとまるように書く。

各教科との一般的つながり

社会Ⅱ文字・書をめぐる文化史。

理科 } 理解や表現のための合理性・科学性
社会 } 理解や表現のための修練性。調和と動きの合理性

保・体Ⅱ技能修得のための修練性。調和と動きの合理性

音楽

美術

Ⅱ芸術性・感覚の陶冶。

技・家Ⅱ技術性。

英語Ⅱ文字性。習字。

それでは、具体的にいつてどんな面が書写につながり関連しているか、教科順に検討していつてみよう。

〔一〕書写と社会科学

社会科学の学習指導は、第一学年では、「地理的分野」、第二学年では「歴史的分野」、第三学年では「政治・経済・社会的分野」と、学年によってはっきり内容を分けて行なわれている。このうち、書写の学習内容と関連する面の多いのは、第二学年で行なわれる歴史的分野であろう。その次に三年での政治・経済・社会的分野に若干見ることが出来る。

1 歴史学習と書写

まず、歴史学習の目標として掲げているものの中に、書写の学習内容が含まれると思うものをあげてみよう。

(1) 現在のわれわれの社会生活が、どのような歴史的事情のもとに形成されてきたかを理解させるとともに、身近なことから現代社会の当面する種々の問題を、歴史的に考えようとする態度を育てる。

(3) わが国の歴史を世界的視野に立って正しく理解させ、それを通して国家・民族の伝統や日本文化の特質などを考えさせ……(略)。

(5) ……(略)……文化の交流や国際協調の史実を考えさせ……(略)。

(6) ……(略)……国家や社会および文化の発展に尽くした先人の業績を理解し尊敬する態度を養う。

(7) 学問・宗教・芸術などの文化遺産を、それらが生み出された時代の学習を通して理解し、それらのもつ意味を考えて尊重し、新しい文化を創造し、発展させようとする意欲と態度を養う。

△中学校学習指導要領31～32ページ▽

これらを一読して書写担当者として思い浮かべるのは、(1)については「文字のおこり」「国語国字問題」、(3)では欧米文化には見られない、文字そのものを素材とした芸術としての、「書」がどう扱われているかということ、また、(5)では「漢字の伝来」「日中書道文化の交流」、(6)(7)からは「三筆」「三蹟」などの書道史・文化史上の先人の業績やその時代的意義、さらには「現代および今後の書道や文字生活はどうあるべきか」等の諸問題がどんな形で登場しているかということである。

これらの中のあるものは「書道」の学習内容に関係するものであり、中学校での「書写」では補助的・参考的な意味しか持たないものであろう。だが「書写」はやがて「書道」に発展するものであり、「歴史」学習の中で、関連する事項がどう扱われているのかをさぐり知っておくことはまた大いに意義があろう。

実際の教科書には、それらがどのように登場しているであろうか。時代順に眺めていつてみよう。

イ 文字のおこり

現在日常使っている文字に関心を持ち、理解を深めていく上において、文字の起源を知り、それがどのような変遷を経て今に至っている

るかを知ることの意義は大きい。「文字（漢字）の歴史」は、書写の学習内容としてとりあげられる事項ではないが、書体や筆順・字形などの理解にからまってくることが多いので、指導者としてもぜひ理解しておかなければならないことである。「歴史」では、世界の四大文明の発生地それぞれどのようなようであったかというより広い視野からそれに触れている。

文字のおこり

これらの四つの地域では文字が発明された。エジプトでは象形文字（絵文字）が作られ、それをのちにフェニキヤ人は表音文字に発展させた。さらにそれをもとにしてギリシャ人はアルファベットをつくった。メソポタミアでは、ねんど板にくさび形文字が書かれ、インドでは象形文字がきざまれた。殷ではかめの甲やけもの骨などに象形文字がきざまれた（甲骨文字）。この文字から今の漢字が発達した。

（参考図 鳥・魚・太陽・穀物・歩の五例について、エジプト・メソポタミア・中国の絵文字の比較図を掲載。）

△三省堂「中学社会」歴史6（7）ページV
これは一つの例であるが、他のどの教科書を見てもほとんど記述に変わりがない。すなわち、指導要領の「2内容」の項「(1)文明のおこり」において

人類のはじめ

世界の文明のあけぼの

日本の原始社会

「人類のはじめ」については、人類のおこりに簡単に触れ、原始人が言語・道具・火などの使用によって、しだいに文明生活

を営むようになったことを理解させる。

「世界の文明のあけぼの」については、世界の四大文明の発地に触れ、さらにその拡大を、ギリシャ文明・ローマ文明・古代インド文明・漢文明などの学習を通して理解させる。

と述べてある線にそって、解説・表現の字句に多少の違いはあるが、どの教科書でも一項としてとり上げ、東西の文字のおこりを説明している。すなわち、象形文字から出発して、西洋では、字面の整理につれて表音文字化してアルファベットとなり、中国では、字面は整理略化されつつもその表意・表音の両性質を失うことなく「漢字」としての道を歩むことになった次第を述べている。あるものはアルファベット全部の字形変遷図を掲げ、あるものは漢字だけ、あるいは漢字とアルファベットの比較図を掲げて解説しているのである。

文字の発生当初においては東西ともほぼ同じ発想をもって出発したのに、それが、西洋においては古代から民族間の交流が激しく、そこにおのずから異言語の表記にも適する表音文字としてのアルファベットを生み、一方、大国として異民族の介入の比較的少なかった中国では、そのまま字面の整理への道だけを歩んで表意文字としての漢字の誕生をみたという東西文字の特性をはっきりと認識させる材料を、どの教科書もここに提供しているわけである。

このことは、ひとり書写の学習指導においてだけでなく、漢字や国語史的分野の学習指導がなされる際、ここにこうした学習がなされていることを活用すべきであらう。

また、

初めは絵文字であった。エジプト人は、この文字を、パピルスという草から作った紙に、あしの莖のペンで書いた。

△大日本図書「中学校社会」9ページV

くさび形文字 粘土板にとがった棒でおして文字をしるし、これを日にほし、固めて保存した。

△同 前V

とある解説から西洋ではすでに古代の文字発生時代から「あしの茎のペン」「とがった棒」という硬筆使用の姿によって、表音文字という文字の簡単さと相まって、実用第一への方向をたどっていったこと、それに対して中国では、字画の多い漢字を「毛筆」という線表現に多様性を持つ書写用具を使って書き、そこに「用」と共に「美」すなわち芸術としての面を兼ね持ったものとして歴史の歩みをすすめたという、東西の文字生活のその後の歩みを暗示する材料を提供していることもさぐることができる。

ここで「象形文字」「絵文字」「甲骨文字」「甲骨文字」等のことばが使われ学習されていることも認識しておきたい。

世界文明のおこりから説きはじめて、次に「日本の古代とアジア」について記述されていく。指導要領において、

国家の形成とアジア

文化の改新と律令制

奈良・平安時代の政治と日本文化の形成

「国家の形成とアジア」については、わが国がアジアの形勢と密接な関係をもちながら統一に向かい、大陸の影響を受けながら国の文化を発展させていったことを理解させる。(略)。

「大化の改新と律令制」については……(略)……この際、唐代文化の特色を明らかにするとともに、制度・文化の輸入にあたって、当時の人々が払った苦心などを考えさせる。

「奈良・平安時代の政治と日本文化の形成」については、

……(略)……国風文化などの学習を通して……(略)……

……この時代の仏教やその他の文化が、国家や貴族の保護のもとに、大陸文化を受け入れて形成された事情と、独自の国風文化に発展していったことを明らかにし、あわせてそれが後世に及ぼした影響についても考えさせる。

△指導要領33頁34ページV

とあげているこの項において、「漢字の伝来」「三筆」「三蹟」「和様の確立」「かなのおこり」等が、実際の教科書でどのように扱われるのか興味深いところである。

漢字の伝来

日中の交流・漢字の伝来の資料として、まずあげられているのが「漢倭奴国王印」である。

一世紀のころ倭の奴国の国王が、後漢の都洛陽に使いをおくり、光武帝から金印を与えられたことが記されている。今から一七〇年ほど前に、九州の博多湾の志賀島でほり出された「漢倭奴国王」ときざんだ金印は、その印であろうといわれる。

△日書「中学生の社会」26ページV

ほとんどの教科書が写真を掲げて扱っている。ここでは印という特殊なものであるために篆書という書体を見せているのであるが、この時代、中国では隷書から楷行草時代に移っていたところで、実際に常用文字として伝来したのはこんな書体ではなからう。そんなせんさくはさておくとして、生徒がここで漢字伝来の最初の資料としてこれを見ているということ、つまり、書体として「篆書」の姿に接していることは記憶にとどめておきたい。

漢字伝来のはっきりした記述は、どの教科書でも、史実の明らか
な次の時代をあげて説明している。

大陸文化のうちで、わが国にもっとも大きい影響を及ぼした
のは、漢字（ママ）・儒教および仏教の伝来であった。わが国
には、もともと文字がなかったから、国のたいせつな事なら
で、のちの世に伝えたいことは、口々に語り伝えられてきたよ
うである。しかし、大陸との交通や帰化人の渡来によって漢字
が伝えられ、五・六世紀のころには、豪族のなかにも漢字を使
うものが出るようになった。漢字を使って記録ができるようにな
ると、日本の歴史もしだいに伝えられることになり、また、
漢字をとおして中国の書物を読み、中国の学問を理解できるよ
うになった。

註・「古事記」や「日本書紀」には応神天皇の時に、百濟か
ら王仁が「論語」を伝えたことをしている。

八日書「中学生の社会」32―33ページV
この時代のものとして、ほかに「船山古墳出土の太刀の銘」（大
日本図書「中学校社会」）や、和歌山県橋本市隅田八幡神社の「文字
を印した銅鏡」（中教出版「日本の歩みと社会」、東書「新しい社
会2」）等の写真を掲げているものもある。

この「漢字の伝来」そのものは書写の学習指導の上に一つの位置
を占めるようなことではない。しかし参考にする程度であるにして
も関連する事項として見落したくないところである。

次の「三筆」「三蹟」が登場するまでの間、教科書では日中の文
化交流がとりあげられる。これらも書写の学習指導に必ず結びつく
ものではないが、三年での鑑賞教材として唐時代の古典がとりあげ

られるときには、ここでの学習を想起させることによってより身近
なものになろう。「書道」ではさらに関連度は高まる。

漢字を使つての国語表記——「万葉がな」については、ほとんど
のものが次の「かなのおこり」のところにまとめて記述しているの
でそこで考えてみたい。

ハ 「三筆と三蹟」「和様」

中学校書写の学習指導では「三筆」「三蹟」は、かなの解説や鑑
賞教材をとりあげる際にその名が登場したり、書話としてとりあげ
られる程度であるが、日本書道史の上では大きな位置を占めるも
のであり、それが歴史の学習の上にとどのように入場するかという点
で興味の深いところである。しかし、中学校の歴史教科書の上にそ
ろって扱われているのは次のものだけであった。

美術も唐の影響を受け、唐絵とよばれる唐風の絵が流行し、
唐風の力強い書風がもてはやされた。

註 この書風を代表するのが、嵯峨天皇・空海・橋逸勢の三
人で、三筆といわれている。

△学研「中学社会」V

この時代の書道を代表する者は、※三蹟とよばれる人々であ
るが、三筆の書風と比べると、その書風には、はっきりと日本
風がみられる。ことに藤原行成のかな書きは、和様の美しさを
よく示したものである。

※ 小野道風（とらふり） 藤原佐理（さり）
（みちかぜ）（すけまさ）

藤原行成（こうせい）の三人をいう。

※ 唐風・唐様に対して日本風のおもむきや様式を和様とい
ふ。

他の教科書では

なお書道も、このころ唐の影響をぬけて優美な日本風の書き方となった。

註 藤原行成が完成したいわれる。

と出てくるもののほかは、註に

弘法大師。詩文や書道にすぐれ、京都に学校を建て……(略)。

△大日本図書「中学校社会」V

空海は書道の大家としても知られているほか、繪芸種智院もつくった。

△中教「日本の歩みと世界」V

とあるのみで、これ以上三筆・三蹟については具体的な記述は見られない。

だがしかし、指導要領に示された解説としてさきにあげた線にそって、国風文化の形成という方面からとりあげ、さきにあげた学研「中学社会」の記述や、

書道も日本ふうになり、宮廷の服装にも、唐風のものにかわって、日本ふうの束帯が用いられた。

註 書道——和様

△中教「日本の歩みと世界」V

と、はっきりと書道のうごきにふれた記述のあるものもある。教科書にはなくとも、この時代の文化の諸方面にわたって国風化されたことの解説が指導者によってなされるとき、書道面では次にあげる「かなのおこり」が必ずとりあげられる。その際に「和様の確立」「三筆」「三蹟」等に触れた扱いが必ずされるものとみてよいよう

である。

用語として、「書風」「唐風」「唐様」「和様」「国風」「三筆」「三蹟」等のことが出てきていることに注意しておきたい。

ニ かなのおこり

「かな」の発生は、日本民族にとってその文化史上特記すべきものであるだけに、どの教科書でも一項目を立てて具体的に記述を試みている。

文化の国風化の最もよい例は、かなが発明され、国文学がおこってきたことである。

古代の人々は、はじめ、漢字の音と訓とをかりて国語を書きあらわしていた。しかし、これでは読むにも、書くにも不便なので、しだいにその簡略化が行なわれた。

そして平安時代になると、漢字の一部をとってかたかなをつくり、また、その草書体から、ひらがなを発明した。

かなが発明されたため、人々は思想や感情を、国語で自由にあらわすことができるようになり、和歌や物語・日記などの国文学が、大いに発達した。

(図版)「かな文字の発達」(字体変遷図)

△教育出版社「歴史のながれ」V

この「かな」の記述にあたっては、ほとんどのものがかなの母字と略化を示す図版を添えている。中には「かな書きの文字」として「貫之集下」の写真版を掲載する(学図「中学校社会」)など、かなり気を配った扱いをしている。

また、前記の引用文中に「漢字の音と訓とをかりて国語を書きあ

らわす」とか、「漢字を使って日本のことばを書きあらわす」とか
いった表現をとっているが、「万葉集」がとりあげられる際に、
「万葉集」は作者の身分にこだわらず、このころのすぐれた和
歌、約四千五百首を集めたもので……（略）……漢字の音と訓
とを使って書きあらわしている。

註・これを万葉がなという。

△学研「中学社会」▽

また「万葉集」という和歌集もつくられた。この和歌集に
は、漢字をかりて国語を表わす万葉がなが使われ、身分の別な
く……（略）。

註、「万葉集の歌」（五例をあげ、一首は原文で示す。）

△中教「日本の歩みと世界」▽

と、「万葉がな」の名もここにはっきりと登場し、歌例をあげて原
文を示すことも行なわれている。（日書・大日本図書・教育出版な
ど。）学図「中学校社会」だけは「万葉がな」に関する解説が見ら
れなかったようである。

「かな」について、以上のような歴史でのいねいな扱いを知る
とき、書写指導者としては知らぬ顔でいられないものを感じる。す
なわち、書写では、中学一年の折「いろは歌」や「五十音図」によ
って、毛筆によるかなの学習指導がすすめられる。生徒がこれまで
無意識に書いてきている「かな」について、ここで認識を新たに
し、正しい字形で、楽に、読みやすく書けるようにすることを目ざ
して、基本的なことから種々と学習指導が行なわれるであろう。

「かなのおこり」「字母（字原）」や、正しい字形を確認させるた
めに「母字——草書——かな」の変遷経過の解説が試みられたりも

するであろう。

あるいは、二、三年では、高度の連続の学習とまではいかないに
しても、速書きによって自然に生じるかなのつづけ書きについての
学習や、かなの古典の鑑賞などもとりあげられる。

それらの際、ともすれば書写・書道の見地からだけの活動になり
やすいものである。だがしかし、ここでこのように歴史教科書での
内容を見てくるとき、密接な関連を持った指導が展開されなければ
ならないことをつくづくと思わせられる。一年の際は二年での歴史
の学習内容を予想し見通した扱いを、二、三年では歴史学習と並行
的あるいは復習し確認していくような扱いをとるなど、なんらか
の形でつながりを生かした学習指導法がとられなければならない。

日本の書道史では、この平安時代を一頂点として、それ以後は明
治に至るまでは下り坂だといってもよからう。このことは歴史教科
書の中でも言える。平安期から後、現代に至るまでの文化の流れの
表面に書写・書道的なことははっきりと浮かび上がってこない。

われわれは、日日漢字・かな等の文字を使って社会生活・文化生
活を営んでいく。その日日使用する文字のよりよい表現のしかたの
理解・修得を目ざすのが書写の学習指導の活動であるが、それは、
今日にいたるまでのそれに関連する歴史を理解することによって、
あざやかに、より確かなものになり、豊かな未来へとつながってい
く。過去をはっきりとふまえた上に展開されてこそ明かき書写生
活が招来されていくのであろう。

書写と歴史の学習内容の上につながる点の多いことを知るととも
に、歴史学習に深い関心を寄せることの必要を重ねて思う次第であ
る。

2 「政治・経済・社会的分野」の学習と書写学習

三年で行なわれるこの分野の学習においては、「(4)現代の社会生活と文化」という項目による学習活動がなされることに留意しておく必要がある。

学問・芸術・宗教・教育などの社会生活における機能を理解させ、文化は人間の品性を高め、その心を豊かにするものであると同時に、個人と社会との結びつきを深め、社会生活を向上させる源泉であることを理解させる。

△「指導要領」45ページV

直接書写にふれた解説ではないが、ここに芸術としての「書」への接しかたがつかわれるものがあることを期待してよいと思う。中学三年では「書道」につながることを考えた扱いがなされることがあろうが、その際、芸術としての「書」についての一言があつてしかなるべきだと思われるし、それがこの社会科での学習をふまえてなされるならば何の支障もなく受け入れられることになるであらう。

また、「(6)現代の諸問題」において、「文化の創造と伝統の継承」として、

産業、経済の振興も国民生活の向上も、けつきよくにおいて、人間の文化の発展にまつものであることを考えさせる。そして、わが国文化のよい伝統を継承しながら、同時に、未来の社会に対する希望をもって、普遍的にしてしかも個性豊かな文化を創造しようとする熱意と態度を養う。

△「指導要領」47ページV

とあることを基本線として、今ここに具体的な教科書での記述例を引用する紙面がないのであるが、ともかく各方面にわたって具体的

な例にふれながら学習指導が展開されていることも心に留めておくべきであらう。

このようにみてくるとき、書写と社会科との間に、教材内容の上から、あるいは考え方の上からいって、関連する面の以外に大きいことに驚かされる。しかも、ここにあげたのは指導要領と教科書を見てその表面にみられるものをとりあげたものであり、実際の教室でこれがどのように展開されていくのかを考えると、みずからもその場にのぞみたい思いにかられてくる。

両者の関連を、ただ教科書だけに求めることなく、実際の学習指導担当者によく話し合い、連けいをもった学習指導が展開されなければならぬことを、ここにみずから肝に銘ずる次第である。

おわりに

社会科だけの考察で紙面を費してしまつたが、ひとり社会科だけでなく、他教科すべてについてこのようにつぶさにその関連をさぐっていくとき、意外につながる面の多く伏在していることを思い知らされていく。他教科については次回を期するとともに、さらに、具体的にそれらからませた扱いをするやと実際どうなるか、どう効果的・能率的に展開されるかという実践面を開拓していくことを今後の課題としてこの稿をひとまず終えたい。

(広島大学付属中・高等学校教諭)